京都大学	博士(文学)	氏名	辻　内　宣　博
論文題目	ビュリダンにおける認識理論と心の哲学 ―アクィナス、オッカムとの比較において		

（論文内容の要旨）

本研究の主題は、14 世紀に活躍した学芸学部の教師であるジャン・ビュリダン（Johannes Buridanus, ca.1295-1361）が、人間の心をどのように捉えどのように理解したかを、主にその『デ・アニマ問題集』第２巻および第３巻を中心として、明らかにすることである。

それでは、どうして心の哲学なのか。そしてどうしてビュリダンなのか。13 世紀後半におけるビッグネームといえば、疑いなくトマス・アクィナス（Thomas Aquinas,1225-1274）が挙げられる。彼は、哲学と神学とをそれぞれ自律しながら相互関係の下にあると捉えて、その両者が同じ目的、同じ真理を目指す異なった観点に立つ学問であると考えていた。こうしたアクィナスの世界理解、さらに敷衍して言えば、自然的な事柄と超自然的な事柄とを包括的な仕方で捉えようとする彼の世界理解への態度は非常に魅力的なものではあるが、他方で何か釈然としないものも感じさせる。つまり、自然的な事柄と超自然的な事柄とが、本当に「理に適った仕方で」理解されうるのかどうかという点について疑問が残るのである。もちろん、「理に適う」ということを非常に緩やかに、また柔軟に捉えるのであれば、アクィナスのこのような世界理解の試みは非常に示唆に富むと言えよう。しかしながら、やはりこうした緩やかさや柔軟性は、「理に適う」という性格づけを逸してしまうように思えるのである。

他方で、14 世紀のスコラ哲学におけるビッグネームといえば、疑いなくオッカムのウィリアム（William of Ockham, c.1287-1347）が挙げられる。彼は、人間の自然本性的な理性によって根拠づけられる事柄と、人間の自然本性的な理性を超える超自然本性的な事柄との間にはっきりと垣根を設けた。さらには、人間の心の中の世界と心の外の世界との区別をも明確に設けたということも見て取れる。こうしたオッカムの世界理解への態度は非常に理知的で論理的なものではあるけれども、しかし他方であまりに思弁的すぎる感も否めない。つまり、理知的で論理的な根拠づけとは、結局のところ、論理学、敷衍すれば人間の心の中の言語が持つ規則の整合性に帰されてしまうことになり、極論すれば、人間の理性や知性の中だけで世界理解が閉じてしまうことにもなりかねない。

そして、これら両巨頭とは違った角度からこの世界全体を理解しようとする人物が現われたのである。つまり、神学的・超自然的世界との関わりを括弧に入れて、しかもこの現実の自然的・物理的な世界と人間の心との密接な関係を基盤にすることによって世界理解を進めていくという新たな戦略を採る思想家が、14 世紀にパリ大学の学芸

学部から登場したのである。その人物こそがビュリダンである。そこで、先の問いに答えよう。どうしてビュリダンなのか。もちろん、現在のところビュリダンの哲学はまだ十分には明らかになっているとは言い難い研究状況ではあるのだけれども、僅かでもビュリダンのテクストに接してみると、彼の「理に適う」ということへの非常に厳格な姿勢をありありと見て取ることができる。それと同時に、彼は人間の魂や心をこの自然的・物理的世界のとの直接的で密接な繋がりの中で理解し、そして「理に適う」ということの究極的な根拠づけを、徹頭徹尾、感覚知覚に求めるのである。こうした仕方で紡ぎ出される彼の哲学観、世界理解は、この自然的・物理的世界と人間の心との接点となる感覚知覚を基盤に据え、また思弁的な領域さえも全面的に感覚知覚との関係の中で把握しようとするものであり、こうした世界理解の構築に共感を抱く者にとっては非常に魅力的なのである。つまり、後期スコラ哲学においては、知性的・思弁的領域を非常に重要視して、ここにこそ人間の本来の在り方を求めようとする傾向が強いが、ビュリダンは逆に、感覚知覚を重視することで人間をあくまで動物の一部として考える傾向が強いのである。

そうすると、どうして心の哲学なのかという疑問への解答も自ずから明らかとなる。それは、アクィナスとオッカムという後期スコラ哲学の両巨頭とビュリダンとの違いを明確に出す格好の材料の一つが、人間の魂（心）の存在論、そしてこうした存在論に基づく心的な活動を理論化した認識理論だからである。本研究はこれらの違いが具体的にどのようなものであったのかということを詳細に検討しようとするものである。

そこで、論者の結論を先取りする形で言えば、ビュリダンにおける魂の存在論、および認識理論は、究極的な根拠づけを全面的にこの現実の物理的世界にのみ置くものだということになる。このことは、アクィナスとの違いを明確化して述べるならば、人間存在の究極的な原理、そして人間の認識活動の究極的な原理をこの物理的世界にのみ求めるということ、また、人間の知性的な認識活動は、徹頭徹尾感覚知覚との連動によってもたらされるものなのだということを意味し、他方で、オッカムとの違いを明確化して述べるならば、人間の認識活動の根源を、この物理的世界と直接に接触している感覚知覚に求めるということ、また、感覚知覚も知性認識も「私」という同じ一人の人間が行っているということを意味することになる。つまり、アクィナスは自然的世界と超自然的世界とを統一的に理解しようという戦略を採ったため、感覚的世界との繋がりを重視する一方で、知性的な世界の本来の在処を超自然的世界に置き、その結果、感覚的領域と知性的領域との明確な区別を設けることになった。このことは、知性認識という活動が、一方で感覚による表象内容を必要とし、他方で、自体的な活動だと認定するアクィナスの理解において象徴的に見て取れる。しかしながら、こうした明確な区別は逆に、感覚的領域と知性的領域との一体性・統一性を緩めてしまうことになるように思われるのである。ここにアクィナスとビュリダンとの分岐路を見てとることができるのである。他方、超自然的世界を哲学的考察の対象とはしな

いという点でオッカムとビュリダンは一致するのだけれども、しかしながら、オッカムはアクィナスよりもさらに強く知性的領域を重要視しており、感覚的領域と知性的領域とを完全に分断してしまっている。その結果、感覚的領域と知性的領域とはそれぞれ独立した仕方で別個に把握されることになるのだけれども、人間の知性的な認識や判断に「理に適う」ということの究極的な根拠を求めるために、オッカムは論理的法則にだけ則ってこの自然的世界全体についての理解を再構築するという方向に向かう。ここにオッカムとビュリダンとの分岐路を見ることができるのである。以上のことを具体的に論証することが本研究の内容となる。

本論文の大まかな構成は以下の通りである。まず第１章「人間の魂の存在論」では、人間の魂(心)の存在論が検討される。それは大きく３つの節に分かれる。第１節では、アクィナスにおける人間の魂の存在論について検討され、その結果、アクィナスの抱える問題点が析出される。続く第２節では、オッカムにおける人間の魂の存在論について検討される。ここでは、オッカムが感覚的魂と知性的魂との実在的区別を設けていることによる問題点が析出されることになる。そして、第3節ではそれまでの分析を踏まえて、ビュリダン自身が人間の魂についてどのように理解していたのかについて解明がなされる。その結果、ビュリダンは、人間の知性的魂が、他の動物たちと同様に「質料的形相」であるという結論を導いていることが確認される。この第1章でのポイントは基本的には「人間の」という形容詞である。つまり、一方で、身体に依存しないように思われる知性認識・思惟という活動を行いながら、他方で、身体の形相・現実態として存在している人間の魂を、アクィナス、オッカムそしてビュリダンはそれぞれどのように理解しているのかということを明らかにすることが主眼とされている。

つづく第２章「感覚知覚論」では、感覚知覚についてのビュリダンの理論が明らかにされる。まず第１節で伝統的なスペキエス理解についての概観的提示がなされる。これは主に、非物理的な（spiritualis）性格を持つものとして考えられたスペキエス理解である。次に第２節では、主にオッカムとの比較において、ビュリダンの感覚知覚論の全体像が分析される。ここでは、オッカムは基本的にはスペキエスという存在者を否定しているにもかかわらず、それに相当するものを感覚知覚という働きにおいて考えているということと、また、ビュリダンの理解するスペキエスとは、物理的な(realis)性格を持つものであるということが導出される。このビュリダンによる物理的な性格を持つスペキエス理解は、後期スコラ哲学の思想潮流においては非常に珍しいタイプであることも明らかにされる。

第３章「媒体中のスペキエスという問題」では、感覚能力の内なるスペキエスではなく、媒体中のスペキエスが主題として取り上げられる。まず第１節において、オッカムによる「媒体中のスペキエス」反駁論が詳細に検討され、そこでの反駁対象は、先に検討した伝統的なスペキエス理解、すなわち、非物理的な性格を持つスペキエスであることが示される。次の第２節において、オッカムによる反駁との比較という観点から、

ビュリダンの「媒体中のスペキエス」擁護論が吟味される。その結果、オッカムもビュリダンもともにこの自然的世界の存在者としては、物理的な性格を持つものしか認めないのだけれども、しかしながら、オッカムはスペキエスの存在の否定、ビュリダンはスペキエスの存在の肯定を支持するという方向へと進み、この違いは両者の世界理解の方法が決定的に異なることに起因することが明らかになる。

さらに第４章「感覚知覚と知性認識」では、その二種の認識の連続性、そしてそうした認識論に伴う個別的な認識と普遍的な認識との関係について、ビュリダンがどういった理論を展開したのかが追求される。第１節では、アクィナスに代表される「普遍的・非質料的・知性」と「個別的・質料的・感覚」というパラダイムについて概観され、これらの３つ組みがそれぞれ非常に密接に結びつくことで、認識論と存在論との全体的な整合性を統一的に理解可能にしている様が解明されることになる。そして第２節では、そのパラダイムをビュリダンがどのように破壊したのかが問題とされ、その結果、ビュリダンは認識論と存在論とを別々に理解する方途を提示していることが明らかとなる。つまり、認識主体（基体）がどのような在り方をしているのかということと、その主体（基体）がどのような働きを行うのかということは性格として一致している必然性はないということを主張したことが導き出されることになる。

最後の第５章「知性認識論」では、人間に特有の認識活動である知性認識・思惟に焦点を当てられる。まず第1節では、人間に固有の営みである知性認識活動について、アクィナス、オッカム、ビュリダンの理論が簡単に比較検討された後で、ビュリダンに特徴的な点が析出されている。次に第２節では、知性に固有の活動として、非存在者の認識、数学的対象の認識、自己認識についてのビュリダンの見解を明らかにすることを通じて、彼の立場の独自性が明確とされている。

最後に「結論」として、アクィナス、オッカム、ビュリダンとの間の違いをもう一度整理することによって、三者のそれぞれの特徴が整理され直される。その結果、ビュリダンという哲学者が行った世界理解の方法は、当時としては非常に珍しいタイプのものであったことが結論として確認される。そして、それこそが「なぜビュリダンなのか」という問いへの最も根本的な解答だとされているのである。

（論文審査の結果の要旨）

西欧中世のスコラ哲学の最盛期は13世紀であると一般にみなされているが、その時期を代表するトマス・アクィナスの死後の13世紀の第四四半世紀とそれに引き続く14世紀のスコラ哲学については、オッカムのウィリアムについての研究を除くと、現在でも未開拓な領域が多く残されており、その時期全体についての哲学史的位置づけはいまだ不明確なままである。かつての一時期には、この時期の自然哲学が近代科学の先駆けとして科学史家の興味を引いたこともあるが、形而上学、認識論、倫理学といった領域での哲学史的研究は、批判的校訂版が未公刊であることなど資料的な制約もあって、最近になって研究の進展が見られ始めたところである。本論文はその14世紀を代表する哲学者、すなわち神学者ではなくパリ大学の学芸学部教師であったジャン・ビュリダン（ヨハネス・ブリダヌス）の魂論についてのわが国で最初の包括的な研究である。全5章からなる本論文は、公刊されているテキストだけではなく未公刊の資料をも用いながら詳細な分析を行うことによって、魂と身体との存在論的関係、感覚知覚の構造、感覚知覚と知性認識との関係、それに知性認識そのものについてビュリダンの立場の明確な姿を描き出そうとしている。そして、このような諸問題に解答を与えるということは、心とそれが捉える世界との関係についてのビュリダンの立場を解明することであり、彼の哲学の根幹そのものを捉える作業となっているのである。このようなビュリダンの哲学の基本的立場について鮮明な解釈を提出している本論文は、彼の哲学の他の分野に関わる今後の研究のために基盤を提供したものとして、高い評価に値するものである。

本論文の大きな成果として挙げるべき点をより具体的に述べるならば、その第一は、人間の魂と認識についてのビュリダンの立場を歴史的文脈のなかに位置づけることによって明確に提示した点に認められる。副題が示すように、論者はビュリダンの理論を常にアクィナスとオッカムの理論との対比の下で検討している。たとえば、ビュリダンは外的事物の感覚知覚を成立させるものとされていたスペキエスの理論についてはアクィナスと歩調をともにしているがオッカムとは対立しつつ、普遍的認識と個別的認識との関係づけについてはアクィナスとは異なる立場を打ち出しながらオッカムとは共通する側面を持っていることを明らかにしているのである。このような戦略は、資料の制約によってビュリダンのテキスト内部で完結した議論を行いがたいためにやむを得ないものである面があるとしても、哲学史研究としては、ビュリダンの哲学だけではなくアクィナスとオッカムの哲学にもより鮮明な理解をもたらすものともなっているのである。この点で本論文は、いくらか粗雑な図式化の傾向が見られ同時代の思想動向の具体的文脈から離れているとしても、13世紀から14世紀にかけてのスコラ哲学内部の理論的対立関係を把握するのに有益な見取り図を与えるものとなっており大きな成果と言えるであろう。

以上述べたような戦略のもとで論究がすすめられる本論文がもっている第二の成果

は、言うまでもなくビュリダンの人間の認識に関わる理論を整合的に一貫したものとして提示したという点である。論者は第１章「人間の魂の存在論」において、人間を他の動物から区別するものとされていた知性的魂が身体にとっての質料的形相であるという理解を、あくまでアリストテレスの質料形相論の枠内で理解するという立場をビュリダンが貫徹していることを明らかにする。つまり、身体を欠いた状態でも人間の知性的魂がそれだけで存続し続けるということは「理に適った」ことではないために否定されていたのである。その上で、第２章以下の人間の認識活動を分析するにあたり、この魂に関わる存在論的立場がビュリダンにおいて一貫して活きているとの解釈を論者は提示する。具体的には、個別認識である感覚知覚とはちがって普遍的な対象の認知であるとアクィナスなどによって考えられていた知性的認識というものも、その認知内容の普遍性の根拠はビュリダンにおいては非質料性つまり身体からの分離という点に求められるものではなくなっており、知性的認識と感覚知覚との連続性、あるいは知性認識をあくまで感覚知覚に依拠したものと見なすという自然主義的立場が強調されることになっている。このように論者はビュリダンの心身関係についての存在論的理論と認識に関わる理論とがなしている統一的な全体を再構成することに成功している。ただし、普遍の知性的認知が徹底的に感覚知覚に依拠しているという解釈は、ビュリダンが普遍の存在論的身分に関しては唯名論の立場をとっているということとどのように関係するのかという問題は理論的には残されたままになっている。この点は惜しまれるが、本論文がビュリダンの認識理論の記述的分析としては哲学史的価値を持っていることに変わりはないのである。

また、上記のようなビュリダンの自然主義的な世界理解というものは中世キリスト教世界においては、そのままではとうてい受け入れがたいものであったはずである。論者もこのような思想的・社会的状況をわきまえて論述をすすめており、キリスト教の神学者ではなくあくまで「哲学者」すなわちアリストテレス解釈者としてのビュリダンが「理に適った」議論の結論として自然主義的世界理解を提示しているのだと解釈している。14 世紀にこのような稀有な哲学観を持っていた哲学者が存在し、オッカムとは異なった意味で近世的な哲学の一面を準備したことを明らかにしたことも本論文の功績の一つであると言えよう。ただ、このいわゆる「二重真理」をめぐる問題については、論者の考察はいまだ断片的なものにとどまっており、ビュリダンの哲学が持っていた哲学史上の位置づけとその意義についてはさらなる検討が期待されるところである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成 23 年 5 月 9 日、調査委員が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。